

【児童への話】

先週の金曜日は、かがやき遠足でした。高学年のお兄さん、お姉さんの計画や準備の下に、とても楽しいかがやき班ごとの時間が過ごせたことと思います。これからも、この活動を大事にしていってください。そして、今日から12月です。今日を入れて、2学期の登校日数は残り19日となりました。2学期のまとめをしっかり進めていってください。

さて、今日は皆さんに、「自分のブレーキ」について考えてもらいます。

人間とその他の動物を分けるのは、よいこと、よくないことの判断を自分でできることです。

皆さんは、よくないと思うことをする前に、自分に「いけない！」とブレーキをかけることができますね。

そのとき、今から言う2つのうち、ブレーキをかける理由として、自分の考え方に近い方を選んでください。あとで手を挙げてもらいます。

①「この人は変な人だと他の人から思われるのを、恥ずかしいと思うから」

②「叱られたり悪いことがあったり、自分に罰が当たるから」

さて、どちらでしょうか？

①の「自分が恥ずかしいと思うから」と考えるのは、日本に昔からある考え方です。このように、人に変な目で見られると恥ずかしいと感じることを、「恥の文化」といいます。

②の「自分に罰が当たるから」と考えるのは、ヨーロッパやアメリカなどの欧米的な考え方です。このように、結局自分が損をするからと思うことを、「罪の文化」といいます。

どちらの考え方も正しいものですが、実は、①の方がより優れた考え方と言えるんです。

①②のどちらも、いけないことをしないよう、自分でブレーキをかけられるということですから、とてもすばらしいことです。でも、②の「罪の文化」の考え方は、「バレなければいいや」「罰が当たらなければいいや」と考えてしまうことにもつながってしまいます。校長先生の大好きな落五小の皆さんには、①の「恥の文化」の考え方のように、自分のしていることを見つめ、「誰も見ていなくても、よくないことをしている自分は恥ずかしい、みっともないと思うから、自分はやらないよ」という、正しい判断ができるようにして欲しいと思っています。

また、よくないことをしてしまったときに、「だれだれがしているから」「みんながしているから」という理由を言う人がいます。これは、とっても恥ずかしいことです。自分の行動や気持ちは自分で決めるものです。皆さんは、よいこと、よくないことを、自分で正しく判断して行動できるとともに、自分のしたことに責任をとれる人になって欲しいと思います。今日は、「自分のブレーキ」についてお話ししました。

【本講話について】

子どもの道徳的思考は、「他律」の意識から始まります。大人から善悪の判断基準を示され、できたらよいこと（褒められたり与えられたり）がある、できなければよくないこと（叱られたり与えられなかったり）になる、という単純明快なものが「他律」です。そこから徐々に、よい子であること、法や社会的側面を重んじることなど、価値基準を自分へと広げていくことになり、「自律」した姿へとつながっていきます。小学校段階はまさにその過渡期となります。

今日の朝礼講話では、およそ8～9割の子どもが「②罪の文化」の考え方に挙手しました。自分の道徳的判断を他者に委ねず、自ら公共の利益のために動くことができる社会の形成者を、じっくり丁寧に育てていきます。今後ともよろしくご協力ください。

